

精神分析患者のカルテとして読む *Mrs. Dalloway*

—Freud の *Beyond the Pleasure Principle* との共鳴—

今 村 梨 沙

Abstract

Mrs. Dalloway (1925) is one of the principal novels written by Virginia Woolf (1882-1941). She embodies the subjects of insanity and death in the story. Her mental illness which she had suffered from since her childhood drove her to depict them in the novel. She brings Septimus Warren Smith who was in a great difficulty of shell shock after the World War I to the novel as her double.

The purpose of this paper is to examine how Septimus's emotions link with Woolf's mental symptoms and the psychoanalytic elements of *Beyond the Pleasure Principle* (1920) written by Sigmund Freud (1856-1939). She had never read Freud and his works by 1939 when she visited him for the first time. Nevertheless, it is noticeable that Septimus embraces the characteristics of psychoanalysis, which Freud introduced in his article. Woolf had a yearning for the land where people have passed through life and death, that is to say, "Beyond the Pleasure Principle." She made Septimus possess and express the desire for death, in other words, the eternal life. Woolf could adopt psychoanalytical interpretations through her intuition and experiences without sufficient study of them. In this sense, it is possible that we read *Mrs. Dalloway* as Woolf's psychoanalytical chart or a patient's medical record.

序

Virginia Woolf (1882-1941) は、“I want to give life and death, sanity and insanity.” (*A Writer's Diary* 56) と宣言し、第4作目の長編小説 *Mrs.*

Dalloway (1925、以下 *MD* と記す) の中で、生と死について、そして正気と狂気を描きたいという意思を表明している。作品の主人公は、上層中産階級の国会議員の夫人 Clarissa Dalloway であるが、作者 Woolf は、狂気を描くために第 1 次世界大戦から帰還した青年 Septimus Warren Smith を登場させている。彼は、戦場で大いに活躍し、勲章も得て昇級する。そして、彼は上官 Evans にも目を掛けられるが、Evans が砲弾で打ち抜かれて戦死する場面を目の当たりにする。そのことがきっかけで、彼は戦争神経症（シェル・ショック）となって、社会復帰ができない程、非常な精神的不安定に苛まれる。彼の言動は、オーストリアの精神分析学者 Sigmund Freud (1856-1939) の論文 *Beyond the Pleasure Principle* (1920) で発表された精神分析医学的見地と著しく共鳴している。

しかしながら、Woolf は書簡において、*MD* の執筆以前に Freud を読んでいない上、“I . . . have only a very amateurish knowledge of Freud and the psychoanalysts ; I have made no study of them.” (*VW Letters* 6 : 91) と、精神分析学者に関する知識さえ、ほとんど持っていないと明言している。彼女が精神分析に関して熟知していないにも関わらず、狂気を描きたいと意思表明し、作中に精神分析医学的要素を持ち込んだ理由は、彼女の幼少時代から抱える精神的不安にある。Woolf は、13歳の時に、母 Julia (1846-1895) を亡くして以来、精神的不安に悩まされ、15歳で初めて死にたいという欲求と闘って、“Life is a hard business.” (*Gordon* 51) と、日記に吐露している。Maze が “Her writing was an attempt to understand her own life” (6) と主張するように、Woolf は自分の実人生を作品に描き出すことによって、自己の人生を振り返り、改めて理解しようとしている。そして *MD* においては、Septimus に彼女が体験した狂気を描出することによって、それらを把握し、体現しようとしているのだ。つまり、*MD* において狂気象徴の役割を担っている Septimus は、Woolf の分身なのである。このことから、Septimus の心理を詳細に辿れば、Woolf の精神的不安に襲われた時の心情

が赤裸々になり、Septimus を通して彼女の精神を分析することが可能だということが察知できる。

そこで、本稿では、*MD* を Woolf の精神分析患者のカルテとして考察してみたい。まず I 章で、Woolf はどの程度、Freud および彼の精神分析の手法を作品に描こうとしていたのかという真意を追求したい。そして、彼女の Freud に対する知識や認識について探してみたい。そして、II 章では、Woolf が如何に実体験を持ち込みながら、精神分析医学的要素を *MD* の Septimus に包含させているのか論じていきたい。

I Woolf の Freud に対する態度

Woolf の *MD* が出版されたのは、1925年 5 月であり、小説自体が完成したのは、1924年10月のことである。当時、精神医学や精神分析は、イギリスにおいて、まだ十分に浸透していなかった時期である。*MD* 出版から約 7 年後の1932年 3 月に、Woolf はアメリカ人の学生から *MD* を執筆した背景に関する質問の手紙を受け取り、それに対する返事の中で、彼女は次のように綴っている。

I have not studied Dr. Freud or any psychoanalyst — indeed I think I have never read any of their books; my knowledge is merely from superficial talk. Therefore any use of their methods must have been instinctive. (VW *Letters* 6: 36)

この手紙の返事から察するに、学生は、Woolf がどの程度、Freud や精神分析を意識して *MD* を書いたのかという質問をしたのだろう。その質問に対して、Woolf は精神分析学者の書物さえ読んだことがなく、つまらない会話 (superficial talk) の中で出てきた程度の知識しかないと返答している。彼女の言う “superficial talk” というのは、彼女が所属していた知的集団 Bloomsbury の仲間との間で交わされた会話や夫 Leonard Woolf (1880-1969) から聞いた話のことである。

確かに、彼女は Bloomsbury のメンバーたちによって、精神分析や Freud の書物の知識に接している。例えば、1918年1月に、Bloomsbury のメンバーである Lytton Strachey (1880-1932) が British Sex Society の会合に参加した際、Freud の話したことを聞いて、Woolf は “I think of becoming a member” (VW *Diary* 1 : 110) と、その協会に参加したいと興味を示している。

また、1920年に Bloomsbury のメンバーでもあり、Strachey の弟 James Strachey (1887-1967) が、彼の妻 Alix (1892-1973) と精神分析医になるための研修を Freud の下で行っている。その研修から戻った彼らの様子を見て、Woolf は書簡の中で、友人にこう書き記している。

The last people I saw were James and Alix, fresh from Freud — Alix grown gaunt and vigorous — James puny and languid — such as effect of 10 months psychoanalysis. . . (VW *Letters* 2 : 482)

Woolf は、精神分析の研修が原因で、James が疲れているという感想を漏らしている。

さらに、Woolf の弟 Adrian (1883-1948) が1923年5月に、個人的に精神分析の診断を受け、医学の勉強をした後の様子を彼女は次のように描写している。

Adrian is altogether broken up by psychoanalysis. . . . I am probably responsible. I should have paired with him, instead of hanging on to the elders. So he wilted, pale, under a stone of vivacious brothers & sisters. . . . I doubt if family life has all the power of evil attributed to it, or psychoanalysis of good. (VW *Diary* 2 : 135-136)

Adrian が精神分析を受けて、疲れ果ててしまったことは、自分にも責任があると、彼女は考える。こうして、周囲の人々が精神分析によって疲労困憊していく姿を見て、彼女は精神分析に対して懐疑的になっている様子が読み

取れる。

Woolf が精神分析のみでなく、医学や医師という存在を信頼できなくなった理由には、彼女の病歴にもある。彼女は、幼少時代から頻繁に精神的不安に陥る傾向があり、その発作が起こる度に、「安静療法 (rest cure)」を強いられた。「安静療法」は、アメリカの医師 Silas Weir Mitchell (1829-1914) が編み出した神経症に対する治療法である。その治療法は、「患者を幼児のように医師に従属した状態におく」という理念の下にあり、通常、患者は社会から隔離され、安静のためにあらゆる知的活動を禁止される。Woolf は、1904年、1913年、1915年と3度の「安静療法」を強いられていて、その治療法に対する憤慨は、看護をしていた夫 Leonard に対しても向けられた。彼女に「安静療法」を強制した数名の医師たちは、みなロンドンの Harley Street を拠点に医療活動をしていて、彼女は彼らへの失意と憤怒を *MD* に描出している¹。

このように、Woolf が精神分析に対して悲観的な態度を取る一方で、夫の Leonard は、1914年に評論を書くために Freud の *The Interpretation of Dreams* (1900) を読み、早期に彼が天才だと確信していた²。そして1917年2月3日には、Leonard がいびきを掻いて眠っている時に、Woolf が懐中電灯とたばこを取ろうとすると、彼は目を覚まし、Freud の魅力を彼女に語った。その時のことを Woolf は、“He [Leonard] then applied the Freud system to my mind” (*VW Letters* 2: 141) と、依然として Freud に対して好感を持たない様子で友人宛に書簡を綴っている。

Woolf は、1920年3月25日の *Times Literary Supplement* において、John Davys Beresford (1873-1947) の精神分析を織り込んだ小説 *An Imperfect Mother* (1920) を ‘Freudian Fiction’ と題して酷評している。Orr は、この Woolf の批評に関して、次のように述べている。

Virginia was critical of Beresford for, as she felt, reducing his

characters to case histories according to the new psychology. She is sarcastic in describing an imaginary analytic patient who formerly collapsed in a fit at hearing a canary sing, but who after treatment can walk through an avenue of cages without a twinge of emotion, having faced the fact that his mother kissed him in his cradle. Virginia was entitled to her fun, of course; but neither she nor Beresford were au courant with Freud's writings. . . . Virginia's review reveals very limited knowledge of Freud and psychoanalysis. (*VF* 3)

Orr は、Woolf と Beresford の双方が Freud を熟知していないことと、Woolf の精神分析に関する知識の乏しさを指摘している。Woolf は、Freud や精神分析を勉強したことがないと公言しているので、Orr が指摘していることは正当である。それだけでなく、精神分析への Woolf の冷淡な態度は、精神分析が単なる理屈にかなった学者の「講釈」にすぎないといった、彼女の作家としての自負心を顕在化しているといえる（遠藤 35）。彼女は、文学的想像力を作中で具現化し昇華する作家という自己の職業を誇り高く思い、逆に精神分析を折々の現象面の解釈として、取るに足らぬものとして処理しているのである。

このような状況の中で、Woolf が Freud や精神分析と実質的な関連性を持つこととなったのは、1924年のことである。Woolf 夫妻が出版社 The Hogarth Press を立ち上げたと同時に、James Strachey が2人に Freud の論文が含まれた本の出版依頼を持ち掛けたのである。数週間の交渉を経て、その本を出版することが決定し、その年の終わりに出版された。Woolf は、本を出版する過程で、校正刷りを読んで、友人に次のような手紙を書き送っている。

I shall be plunged in publishing affairs at once; we are publishing all Dr. Freud, and I glance at the proof and read how Mr. A. B. threw a bottle of red ink in the sheets of his marriage bed to excuse his impotence to the housemaid, but threw it in the wrong place, which

unhinged his wife's mind, — and to this day she pours claret on the dinner table. We could all go on like that for hours; (*VW Letters* 3: 134-135)

Freud の論文が掲載されている本をすべて The Hogarth Press から出版することとなり、Woolf は大量の彼の校正刷りを読まなければならなかったもので、嫌気がさしている様子が見て取れる。校正刷りを一瞥しただけで、Woolf が Freud を読んだことにはならないし、これまでの精神分析に対する彼女の嫌悪感が相変わらずこの手紙から滲み出ている。

ところが、1936年5月6日に Freud の80歳の誕生日の祝賀会が催された際、200人ほどの芸術家の祝辞や贈り物が届き、その中に Woolf の名前があった。彼女は、祝辞の最後の段落で

We, the undersigned, who cannot imagine our mental world without Freud's bold lifework, are happy to know that this great man with his unflagging energy is still among us and still working with undiminished strength. May our grateful feelings long accompany the man we venerate. (*Jones* 32-33)

と、彼に対する尊敬の意を表す言葉を送っている。依然として、彼女は Freud を読んでいない段階だが、多くの芸術家への Freud の影響力を十分に理解していることが明らかである。彼女のこの心境の変化は、イギリスにおける精神分析の浸透によるものであると、Orr は分析する (*VF* 12)。Woolf が精神分析や Freud に嫌悪感を抱いていた1920年代は、イギリス、特に彼女の住むイングランドでは、精神分析がほとんど受容されていない時期であった。だが、1930年代に入ると、2つの世界大戦のために戦争神経症患者が多発することによって、精神分析治療が次第に認められていった。それに伴って、Woolf も精神分析および Freud を受け入れ始め、その偉大さに気付き始めたのである。彼女が、Freud の80歳の誕生日に祝辞を書いた理由に、その証拠が認められる。

そして、Woolf は1939年1月28日に夫 Leonard の誘いで、Freud を訪ねる (Orr VF 9)。そして、その訪問を契機として、同年12月2日には、“Began reading Freud last night; to enlarge the circumference: to give my brain a wider scope: to make it objective; to get outside.” (*A Writer's Diary* 309) と、57歳になって、ついに視野を広げるために Freud を読み始めたこと記している。6日後には、“I'm gulping up Freud.” (*VW Diary* 5: 249) と、Freud を熟読している様子が窺える。さらに、その9日後、彼女は Bloomsbury の集まりで、メンバーと Freud を読んだこと記している (Orr VF 9)。

こうした一連の日記の影響だろうか、1930年代以降、特に第2次世界大戦前後の彼女の作品は、精神分析の影響が強く見受けられるが、それは Freud の男性優位の思想に反論するべく、フェミニズムが展開されているという見解が主流を占めている (遠藤 35)。だが、ここで再確認しておきたいことは、Woolf は1939年まで、Freud を熟読したことがなかったことである。1939年以降に、彼女が執筆した作品といえば、エッセイ ‘A Sketch of the Past’ (1939) と、死後出版された小説 *Between the Acts* (1941) の2つだけであり、どちらもフェミニズム的要素を持つ作品ではない。1938年にはフェミニズムの要素の濃厚なエッセイ *Three Guineas* を執筆しているが、まだ彼女は Freud の作品を読んでいない時期である。従って、Freud の影響を受けていると解釈されている彼女の作品は、Bloomsbury のメンバーや彼女の周囲の人々の話で構成された不正確な精神分析の知識の上に成り立っていることになる。彼女の1930年代以降の作品に見受けられるフェミニズム思想は、Freud の男性優位思想へ抵抗を示しているというより、むしろ Bloomsbury の仲間との関わりの中で、当時の女性の社会的地位に一石を投じていると、理解する方が妥当である。

これまで眺めてきたように、Woolf は Freud を熟読したことがなく、彼女の精神分析に関する知識は、人の話や行動を見聞きしただけであった。そ

して、そうした断片的な知識を *MD* に描こうとする様子は、どこにも確認できなかった。Freud や精神分析に対しては、当初はひどく嫌悪感を曝け出していたが、戦争などの歴史的背景の中で、承認し、支持するまでに至った。では、彼女は如何にして、*MD* の中で Septimus に精神分析医学的見地を顕在化し、Freud の *Beyond the Pleasure Principle* と共鳴させたのか、次章において探りたい。

II Woolf の「快感原則」の「彼岸」への憧憬

Woolf は、狂気を描くために、作中に Septimus Warren Smith という青年を持ち込んだ。彼は、主人公 Clarissa Dalloway と直接会うことはないが、彼女の分身という重要な役割を担っている人物だ。Clarissa 以上に、彼は Woolf の分身だと言える。Woolf は *MD* を執筆しながら、“Am I writing *The Hours*³ from deep emotion? Of course the mad part tries me so much, makes my mind squirt so badly that I can hardly face spending the next weeks at it.” (*A Writer's Diary* 56) と、狂気の場面、つまり Septimus を描く時に、非常に苦痛を感じることを訴えている。なぜなら、彼の感情は、Woolf のそれと一致するものであるからである。では、Septimus を考察して、Woolf の実人生を垣間見ると同時に、それらが如何に Freud の *Beyond the Pleasure Principle* (以下、*BPP*) の精神分析医学的見地と呼応しているのか眺めてみよう。

BPP は、Freud が最初に「死の欲動 (“death instinct”）」(*BPP* 44) という言葉を用いた論文である。「死の欲動」とは、死へ向かおうとする衝動のことである。「快感原則 (“the pleasure principle”）」(*BPP* 7) とは、常に不快を避けて、快を得ることを目的としている心的機能のことであり、すべての生命体に備わっている。この恒常性に基づく「快感原則」の「彼岸」つまり、生死を超越した理想の境地へ辿り着こうとするならば、そこには「死の欲動」が働くと、Freud は断言する。命あるものには、「生の本能 (“life

instinct)」（BPP 40）に拮抗するものとして、「死の本能」、つまり「死の欲動」が存在する。その一方で、“... the living organism struggles most energetically against events (dangers, in fact) which might help it to attain its life's aim rapidly — by a kind of short-circuit.”（BPP 39）つまり、「生の本能」が、生命体を生かそうと「死の欲動」に打ち勝とうとする。「生の本能」は、生命体を死の「迂回路」へと導くのだ。こうして生命体、つまり人は、一般に「死の欲動」に勝って、「生の本能」が命を統治している状態が生理的に正常であるということになる。

しかし、Septimus は、「快感原則」の「彼岸」へと到達しようとした。彼は、上官の Evans の戦死がきっかけで、戦争神経症となり、ますます幻覚や精神的不安に陥っていく。そして、「死の欲動」が度々彼を襲うのである。その欲動は、Harley Street で医療活動をする Dr. Holmes と Sir Bradshaw が、彼の元へ押しかけてきた時に最高潮に達する。Sir Bradshaw は、Septimus の妻 Rezia に “The people we are most fond of are not good for us when we are ill.”⁴ と言って、2人を引き離し、Septimus を「安静療法」の下に置くべく、療養所へ入るよう勧めていた。この場面は、Woolf が精神的不安に陥った時に、医師たちが Woolf 夫妻を離して、彼女に「安静療法」を強いた事実と重なる。また、Woolf は1904年にひどい精神的不安に陥った時、窓から身を投げて自殺未遂を図ったことがある（Gordon 51）。その後、彼女の精神状態は回復したが、1910年に再び彼女の精神状態が危険の兆しを見せた時、彼女は療養所に送られそうになったので、それを逃れるために、“I shall soon have to jump out of a window.”（Gordon 52）と姉 Vanessa（1879-1961）に書き送っている。この Woolf の体験が、見事に Septimus に体現されている。Dr. Holmes と Sir Bradshaw が、Septimus を強制的に療養所へ送ろうと、Septimus の住むフラットの階段を駆け上がる音が聞こえた時、Septimus は次のように考える。

There remained only the window, the large Bloomsbury lodging-house window; the tiresome, the troublesome, and rather melodramatic business of opening the window and throwing himself out. It was their idea of tragedy, not his or Rezia's (for she was with him). Holmes and Bradshaw liked that sort of thing. (He sat on the sill.) But he would wait till the very last moment. He did not want to die. Life was good. . . . Holmes was at the door. "I'll give it you!" he [Septimus] cried, and flung himself vigorously, violently down on to Mrs. Filmer's area railings. (*MD* 164)

Septimus が、医師たちによって強制的に療養所に送られることを嫌悪して、瞬時に投身自殺を思い浮かべる点は、作者 Woolf の実体験と見事に合致している。彼女は、Septimus と Rezia、そしてその 2 人に対峙させるように Dr. Holmes と Sir Bradshaw を描いている。ここに、Woolf の患者として抱く、Harley Street で医療活動をする医師たちに対する不信と失望、および療養所に対する嫌悪感が顕著に描き出されている。この場面で、Septimus は本心では死ぬことを望んでおらず、土壇場まで飛び降りることを待つ。彼は、生を願っている、つまり「快感原則」が機能しているのだ。だが、彼の意志に反して、医師たちに屈辱を与えてやろうと目論む「死の欲動」が発生する。そして、「生の本能」と「死の欲動」の葛藤の末、後者が勝利を収め、投身自殺をして、彼は「快感原則」の「彼岸」へと到達するのである。この「死の欲動」の勝利は、Woolf が最終的に入水自殺した事実をも彷彿させる。

MD の草稿には、Septimus が、「快感原則」の「彼岸」へ到着することを夢想する場面が描かれていた。しかし、Woolf はその場面を削除している。削除された次の場面を引用しながら、Gordon は Septimus の幻想を以下のように分析する。

In another vision he is 'the first man who had crossed from life to death. . . . Telling himself that he has passed 'through' death, he is tossed on to a further shore '& for the first time in the whole world,

the dead were alive. . . . I have passed thorough death, he said. I am the first to cross.' Others will follow: '& now, through evolution, a few of the living have access to this world.' (53-54)

Septimus は、自分が世界で初めて生から死へ渡った人間だと考える。彼は、死を通り抜け、“a further shore” すなわち、「快感原則」を克服した「彼岸」へ辿り着く。そして、彼に続いてまた他の死人がこの「彼岸」へやってくる。彼は、これから「快感原則」の「彼岸」へ到達する人々の先駆者となって、ここへ到着し、また彼らを導く存在となる。次の引用は、彼にその理想の境地へ導いてもらうために現れる死人たちを象徴している。

A sparrow perched on the railing opposite chirped Septimus, Septimus, four or five times over and went on, drawing its notes out, to sing freshly and piercingly in Greek words how there is no crime and, joined by another sparrow, they sang in voices prolonged and piercing in Greek words, from trees in the meadow of life beyond a river where the dead walk, how there is no death. There was his [Septimus's] hand; there the dead. White things were assembling behind the railings opposite. But he dared not look. Evans was behind the railings! (*MD* 28)

作者 Woolf も、精神的に不安定な時期に、鳥がギリシア語でさえずるのを幻聴で聞いたことがあるので (Nicolson 18)、この場面にも彼女の実体験が映し出されていることが読み取れる。Evans や柵の後ろに集まる戦死した人たちは、まだ「快感原則」の「彼岸」へ到達していないので、Septimus に迫り来る。そこで、世界で最初にその「彼岸」へ到着した彼が、彼らをそこへ導かねばならないのだ。死ぬことは「快感原則」の「彼岸」への到達、つまり生死を超えた理想的境地への到着を意味する。それゆえ、“there is no death” と、死後の世界を彼の中で創造するのだ。そこで彼は、“... leaves were alive; trees were alive. And the leaves being connected by millions of fibres with his own body, there on the seat, fanned it up and down; when the

branch stretched he, too, made that statement.” (*MD* 26) と述べているように、彼の身体、すなわち彼の魂が自然と一体化して生きているように感じる。つまり、「快感原則」の「彼岸」へ到着した後も、自然と共に彼は生き続けるのである。

この死後の世界、いわゆる「快感原則」の「彼岸」の概念は、作中の分身である Clarissa にも連鎖している。彼女は、死について熟考した結果、次のような結論に達する。

... or did it not become consoling to believe that death ended absolutely? but that somehow in the streets of London, on the ebb and flow of things, here, there, she survived, Peter survived, lived in each other, she being part, she was positive, of the trees at home; of the house there, ugly, rambling all to bits and pieces as it was; part of people she had never met; being laid out like a mist between the people she knew best, who lifted her on their branches as she had seen the trees lift the mist, but it spread over so far, her life, herself. (*MD* 12)

彼女は、自己が消滅しても、昔の恋人 Peter Walsh の心の中で生き続けると考える。さらに、彼女の魂は、親しい人々にだけでなく、あちらこちらの木々や他人の家、会ったことのない人々の一部となると考えている。そして、彼女の命は、霧のようにどこまでも広がっていくというのだ。つまり、彼女の魂は、死後、「快感原則」の「彼岸」へと到着し、そこでなおも生き続ける。こうした一連の死後の「快感原則」の「彼岸」の概念は、単に精神的に過剰に不安定な人の行き過ぎた空想だと捉えられる傾向がある。しかし、Woolf は、その「快感原則」の「彼岸」を単に偶像化し美化するだけでなく、*MD* の中でそれを人間の深層心理の現実として具現化することを試みたと解釈できる。

また、Septimus が Evans を幻視する心的機能は、Freud が *BPP* において強調した「反復強迫 (“compulsion to repeat”)⁵」によるものである。「反

復強迫」とは、過去に受動的に受けた苦痛の経験を、今度は能動的に体験しようとする、無意識的な繰り返しを行う心的機能である。特に、戦争神経症患者には著しく現れる。Septimus は、戦争から帰還後、あちこちで Evans を幻視する。彼が Evans に固執する理由は次のように示唆されている。“... when Evans was killed, just before the Armistice, in Italy, Septimus, far from showing any emotion or recognizing that here was the end of a friendship, congratulated himself upon feeling very little and very reasonably.” (MD 96) 彼は、Evans が戦死した時、無関心であった自分を喜ばしく思った。だが、帰還後、彼は Evans の死を悔やめなかったことに対して、罪悪感に苛まれる。親しい上官の死を受動的に、ほぼ無関心に目撃したため、今度は彼の死を Septimus は自ら再現して、悼もうと、繰り返し彼を幻視するわけである。

作者 Woolf が、自分の体験した不安定な精神を MD の中で描出した理由として、Gordon は、過去への逃避を挙げている (57)。苦痛に苛まれながらも、過去の狂気の体験を描きたいという衝動が、彼女の創作への情熱を滾らせる。この心理状況は、彼女が受動的に置かれた精神的不安を再び呼び戻して、今度はそれらを能動的に体験しようとする、「復強迫」に類するものとして捉えることが可能ではなかろうか。

Woolf が、Freud の知識に精通していなかったにせよ、BPP との呼応を顕著に見せる Septimus や Woolf 自身の心理を突きつけられる事実から、Woolf は Freud や精神分析の理論を直観的に、かつ経験的に把握していたということが明らかである。Woolf が実体験に基づいて、精神分析患者に現れる症状を作品に描出できたことは、彼女が適切な治療法として精神分析を受けるべき人間であったことを暗示しているということも付記できるかもしれない。

結 び

Woolf の *MD* は、Freud を意識して執筆されているという認識が多く見受けられる。しかし、彼女は1939年まで Freud や精神分析に関して熟知していなかった。そのため、*MD* に読み取れる精神分析医学の見地のほとんどは、彼女の切迫した精神的不安の経験から展開されているものだった。とりわけ、彼女の苦渋の体験を体現するべく作中に登場させた Septimus には、精神分析医学に通ずる見解が作者の無意識のうちに反映されていたと言える。それは、人々は死後に「快感原則」の「彼岸」へ到着するという、Freud が *BPP* において発表した、生と死を超越した場所へ到達するという概念と共鳴していた。Woolf にとって、「快感原則」の「彼岸」は、理想の境地であったので、その憧憬を Septimus に託したのである。

また、*MD* の中で、受動的にした苦悩の経験を今度は能動的に体験しようとする「反復強迫」は、Woolf が日常で経験した精神的不安を戦争神経症患者の症状へ転換されて、Septimus の症状に応用され、具体化されている。Woolf は、苦痛に苛まれながらも、自己の心情を作品に披瀝し続けた。彼女は、自己の狂気と正気の相克があったからこそ、*MD* にそれらを見事に具現化することができたのである。彼女の持つ精神的病理を作品に昇華させたという意味において、*MD* は Woolf 自身の精神分析的なカルテとして読むことができると言える。

注

1. Harley Street には、医療関係のオフィスが多く存在する。彼らに対する Woolf の心情に関しては、2章で詳細に述べる。
2. Douglass W. Orr, *Virginia Woolf and Freud* (Clemson: Clemson University, 2003.), p. 2. 以下、VFと記す。本稿中の Orr の引用は、すべてこの著書のみに掲げる。
3. *Mrs. Dalloway* のこと。草稿の段階では、*The Hours* という題名で *MD* を執

筆していた。

4. Virginia Woolf, *Mrs. Dalloway* (1925) (London: The Hogarth Press, 1980.), p. 162. 以下、本稿中の *Mrs. Dalloway* からの引用は、すべてこの版に拠る。
5. Freud は、「反復強迫」を “. . . something that seems more primitive, more elementary, more instinctual than the pleasure principle which it over-rides.” と述べ、「快感原則」を凌ぐものだと説明している。Sigmund Freud, *Beyond the Pleasure Principle Group psychology and Other Works* (1955) Trans. James Strachey, (London: The Hogarth Press, 1975.), p. 23.

引用・主要参考文献

- Abel, Elizabeth. ed. Bloom, Harold. “Narrative Structure(s) and Female Development: The Case of *Mrs. Dalloway*.” *Virginia Woolf’s Mrs. Dalloway*. New York: Chelsea House Publishers, 1988.
- Freud, Sigmund. *Beyond the Pleasure Principle Group psychology and Other Works* (1955) Trans. James Strachey. London: The Hogarth Press, 1975.
- Gordon, Lyndal. “The Question of Madness.” *Virginia Woolf: A Writer’s Life*. New York and London: W. W. Norton & Company, 1984. 51-67.
- Jones, Ernest. *The Life and Work of Sigmund Freud vol. 3*. New York: Basic Books, 1957.
- Maze, John R. *Virginia Woolf: Feminism, Creativity and the Unconscious*. London: Greenwood Press, 1997.
- Minow-Pinkney, Makiko. *Virginia Woolf & The Problem of The Subject*. New Brunswick and New Jersey: Rutgers University Press, 1987.
- Nisolson, Nigel. *Virginia Woolf*. New York: Viking Penguin, 2000.
- Orr, Douglass W. ed. Chapman, Wayne K. *Psychoanalysis and the Bloomsbury Group*. Clemson: Clemson University, 2004.
- . *Virginia Woolf and Freud*. Clemson: Clemson University, 2003.
- Woolf, Virginia. *A Writer’s Diary* (1953). San Diego, New York and London: A Harvest Book Harcourt, 1981.
- . ed. Bell, Anne Olivier. *The Diary of Virginia Woolf vol. 1: 1915-1919*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1977.
- . ——. *The Diary of Virginia Woolf vol. 2: 1920-1924*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1977.
- . ——. *The Diary of Virginia Woolf vol. 5: 1936-1941*. New York:

- Harcourt Brace Jovanovich, 1977.
- . *Mrs. Dalloway* (1925). London: The Hogarth Press, 1980.
- . ed. Nicolson, Nigel and Trautman Joanne. *The Letters of Virginia Woolf vol. 2: 1912-1922*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1976.
- . ——. *The Letters of Virginia Woolf vol. 3: 1923-1928*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1977.
- . ——. *The Letters of Virginia Woolf vol. 6: 1936-1941*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1981.
- 遠藤不比人 『死の欲動とモダニズム——イギリス戦間期の文学と精神分析』東京、慶応義塾大学出版会、2012年。
- 小此木啓吾 『フロイト思想のキーワード』（2002年）東京、講談社現代新書、2008年。
- フロイト、ジークムント 『自我論集』（1996年）竹田青嗣編、中山元訳、東京、筑摩書房、2011年。